太字内信第三拾七号

本便ヲ以テ別紙内信ヲ通外務ヘ
報ス仕置ハ何ト共ニ会之為ノ
右扶出送ル仕候也

明治十三年九月十九日

参議事品川志摩

大隈参議殿
伊藤参議殿

正十一年四月贈

外字別信第六拾九号　　写

録事報告

九月一日付ヲ以テ倫敦ヲ発シタル
電報ヲ見ルニ
方今俄京ニ於テ清俄之難事ニ係ル談判之
模様ヲ聞クニ清国政府ハ伊犂ヲ俄国ニ譲與セン
トス然レトモ俄政府ハ更ニ彼此ニ境界ヲ改正セント
スル由ナリ故ニ当決先ノ談判ハ北京ニ於テスベシト
決シタル由リウトル電報ニ見ヘタリ

左宗棠上京之説

過日以来北京ニ在ル洋人カ本報スル處ニ因レハ左
相堂ハ既ニ該地ヘ到着シタリトニフモノアリ然レトモ
甘粛省蘭州府内ニ去年以来毛織器械局ヲ

開設セシニ付其装置ヲ為ス雇役セラルル日耳曼
人完工の工頃ハ本港ヘ碇泊セシモノ有リ真言ノ
虞ヲ因レハ左氏北京ヘ近発スルトノ説ハ真ニ肯綮
ニテモ聞及ヘリト

俄國兵備之事

日国軍艦アフリカ号ハ去月十七日既ニシンガポール
ヘ到着トノ来報アリ而シテ方今歐洲ノ発ニ該
港ヘ到着スル変ノ俄国軍艦ハ總テ日港ヘ
停泊シテ京後ノ命令ヲ待ツヘシト示達アリト云フ

俄国副水師提督レスソフスキー
着港之事

本月三日提督ハ佛国郵船ペイホー号ニ搭坐シ妻
子ト共ニ本港ヘ到着セリ日既ノ附属員ハ

ケプテイン　ノウラスシルスケ氏
ハ　ケレウラストソド氏
レフテナント　ロスセル氏
外四名

但シ提督ト談話ノ接説ハ別書ヲ以テ報ス

清州地方近聞

吉林ヘ赴任シ居タル清官頃日北京ヘ到リ云フ変
ニ因レハ俄国ハ黒龍江ニ北面ニ重兵ヲ備ヘ以テ
琿春地方ヲ保護スル外兵員一千五百名ヲ黒
龍江ノ要區ニ置キ附近ノ海面ニハ兵船四隻ヲ
繋キ所ニ水雷ヲ埋伏ス故ニ該国ノ人民ハ惴
々地トシテ戦々之恐興ヲ唱ルトノ云ヒ聞

長江水師提督之事

彭玉麟ハ長江一帶之港口防禦方ニ従前ニ力セシ人ニシテ既ニ水師提督タリ然ルニ今度更ニ駐所ヲ鎮江ト定メ両江總督ト同等ノ位階ニ進ミシト

街説致居候

外借ヲ需ル事

清國政府ハ官員ヲ派出シ上海ノ或ル洋商ヨリ三百萬両ノ金項ヲ借入セント既ニ丈端到ヲ如メ居ル由ナリ

呉淞口砲臺之事

装置ヲ為ス砲

防戰炮　九門

アームストロング　七門

クロップ砲　二門　但シ口径七寸八寸九寸ノモノ

砲兵器ヲ

或ル者ノ名

厚鉄ノ胸壁ヲ築ヒタル臺ハ海面ニ沿フタル一方ニテ其他ハ三面ニハ厚鉄ヲ用ヒズトカヲ

兵備之事

頃日天津ヨリ委員劉姓到着シテ現在上海ノ軍機局ハ滞留セリ其媾買ス物項中ニ紅白ノ綿綢アリ之ヲ以テ彩旗ヲ造リ海関一帶ニ砲臺ハ用ヒント云ヘリ

前報ニ誤

李鴻章ハ両度上京スヘシト上諭アリシヲ相ヲ設ケテ行カザリシト云フ報仕置ス金ヲ其根ニ立ルヲト再報ヲ接ヲ事ニ久

清俄和戦之変

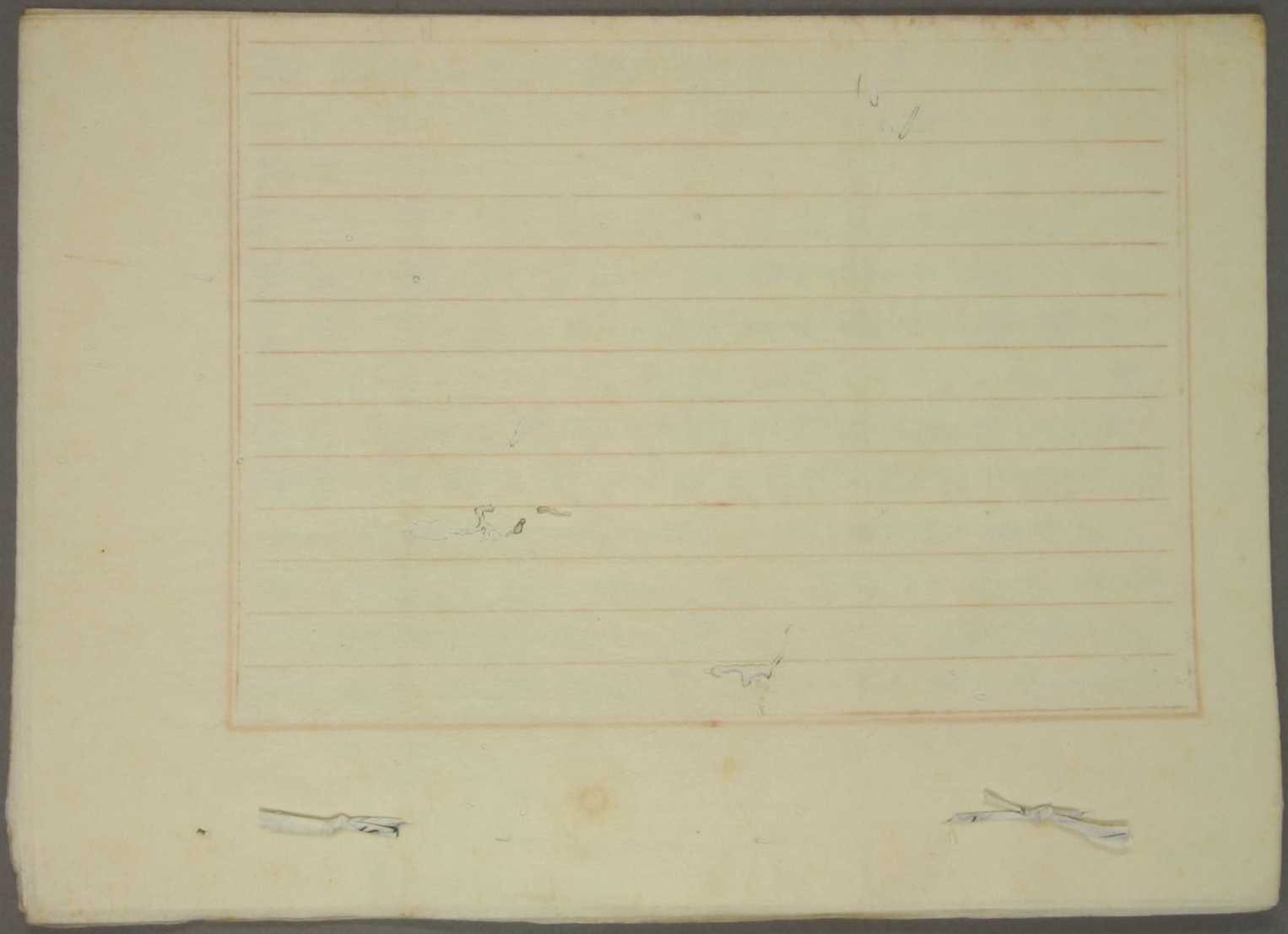
昨日本庵ニ接スル留德尔電信ヲ閲スルニ曰リ
俄国ハ中国ト和睦ヲ商定シタリ其和約ハ北
京ニ於テ御璽ヲ美蓋用スベシト
右ハ為来ノ信用致シ難ク降兵電旨
之儀申上候也
右仮用書
明治十三年九月九日　　井上馨

外務卿殿

明治十三年九月四日

俄国水師提督レスソフスケー氏ト面晤ノ
時同氏述話之大意

支那ヘハ今度初テ來到スレ𪜈日本ヘハ俄國船艦
一葉坐シテ二十二三年前往到セシ事アリ既ニ
貴國ト我カ條約交換ノ節モ「ラーチヤチント」共ニ
長崎函館下田等ヘケプテイン之現職ヲ以テ
往來致シ尔後俄國ニ於テ皇帝陛下御宴
ノ節モ屢シ複本公使ヘモ出會懇意ヲ致シ
候小官貴國ニ於テ官民ノ厚誼ヲ受ケ且ツ
風土ノ良和ナルヲ宴席ニ於テ我陛下ヘ親奏
シ實ニ忘シ難シト云ヒシカバ陛下自ラ小官ノ手ヲ

取り授ケ公使ノ憂ヘ速ニ行今ハ汝ガ言ヒシ丈ケ
公使ニ向ヒ演述セヨトノ諭旨アリシ位ナリシ（以下
雜話ヲ略ス）
備テ今報ハ未ダ九州佛曉関駛ノ廣島丸保ニテ
一直ヒ清ヘ徒行致シ家族ハ該處ヘ殘シ置先ツ
暉春港ヘ回航ノ心得ニ付右両港ヘハ屢ヒ來徒ス
ハ積ナリ
歐洲電報ノ報告ニモ又タ香港並ニ本港ニ於ケル
新聞紙ニ小生ハ北京ヘ徒キ條約改正ノ委任ヲ受
タリト有ルニ依テ然ラス唯ニ水師提督タル者ニ
有之候
我カ廟堂上ノ確論ハ崇厚ニ命シテ問モナク獄
ニ繫シ死刑ノ罪ニ處スルノ上諭下タリシ以上ハ此先仮

令何等の使節ヲ清國政府ヨリ俄京ヘ送ルモ真実
之レヲ引受ケ閲談スルノ堪類ナラス到底無益ト
存スレハ曾紀澤ガ出京ハ敢テ拒絶セス穏カニ其來
意ヲ聞糺ノ為ト唱シ居リ彼ノ兼ネノ通北京ニ
駐札スヘキ我ガ使ブツウ氏ハ始メヨリ右ノ該到ニ
関係致居候ニ付曾紀澤ノ起程後ハブツウ氏
親ラ北京ニ到リ之ニ該到ヲ始メン積ニ有之ニ我
政府ハ敢テ戰ヲ好ムヲ非ス云清国政府從前ノ
所為ハ実ニ其責ヲ失スルノ甚キモノト存ス